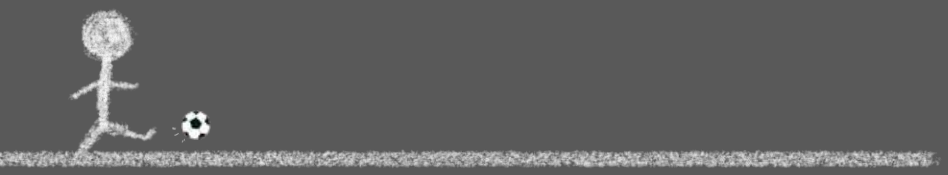
各種委員会の取り組み

第１種委員会 / 第３種委員会
第４種委員会 / 女子委員会 / キッズ委員会
シニア委員会 / 技術委員会 / 医学委員会



【第1種委員会】

1 種委員会の現状と取り組みについて

第1種委員会　委員長　髙木　真一

第1種委員会は社会人・大学・高専・専門学校・自治体・自衛隊各関係連盟及び関連委員会のご協力の元、2023 年度の各種事業を終了することが出来ました。

第1種所属各連盟主催の全道大会は、道内各連盟・協会関係者のご尽力と参加選手、チームスタッフの熱意により、どの大会も活気のある有意義な大会となっておりました。全国大会においては、全国社会人サッカー選手権大会で北海道十勝スカイアースが 2 回戦進出、全国自治体職員サッカー選手権で函館市役所が 2 回戦進出の成績を収めております。

また、第1種内の各種別においても、全国の強豪との対戦を経験すること競技レベルの向上が認められており、2024 年度は全国上位の成績を収めることを期待しています。

また、種別内のチームから J リーグチームへの入団者もおります。

登録チーム数及び全道大会参加チーム数の減少等、第1種を取り巻く環境は厳しさが続いておりますが、2024 年度においても所属各連盟で問題点を共有しながら、サッカーを楽しみ続けることを忘れずに競技力及び大会運営能力の向上に向けて努力していきたいと思っております。

【第3種委員会】

プレイヤーズファーストの観点から

第3種委員会　委員長　大石橋　計幸

日頃より第 3 種委員会の事業にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

北海道、ブロック、地区カブスという各リーグ戦において、2nd や 3rd チームを編成して出場する場合、一部選手の年間出場時間が著しく短くなる可能性もあった、同日連日における他リーグへの出場制限規程を見直したのち開幕した今シーズンです。大所帯チームの指導者の皆様には、一定の評価をしていただいているものと自負しております。

一方で、サッカーに限らず、多くの中学校の部活動は、部員数が急減し、部活動地域移行、地域クラブ化、拠点校方式といった言葉を頻繁に目に、耳にする時代となりました。

道内にも先駆的な取組を展開されている市町村が数多くありますので、その情報を積極的に収集、展開し、プレイヤーズファーストの観点が欠落しないよう、中学生年代のより良いサッカー環境の構築に努めてまいります。

【第4種委員会】

たくさんの方々とのつながりに感謝！

第4種委員会　委員長　佐賀　主昌

４種委員長を仰せつかった４年前。新型コロナウイルス感染症の対応からのスタートでした。判断や決断を迫られることも多くありましたが、たくさんの皆様から御指導・御助言をいただき乗り越えることができました。このことをはじめとして、この４年間、大会会場で、オンラインで、メールやお電話で、４種関係者をはじめ、北海道・全国のサッカーに携わっているたくさんの方々とお話をさせていただきました。そうした多くの方々とつながることができたことが、自分の人生にとって大きな財産になったと感謝しております。何か大きなことを成すためには、人と人のつながり、協力は不可欠です。関係の皆様におかれましては、北海道サッカーの発展のためにも「つながり」を大切に、それぞれのお立場で引き続き御活躍いただければと思っております。委員長としては、至らない点も多く、御迷惑ばかりおかけしたことをこの場でお詫びさせていただきます。４種委員長という立場から離れますが、北海道の少年サッカーの充実、サッカーファミリー拡大という熱い思いは、持ち続けるつもりです！４年間、お世話になりました。そして、ありがとうございました。

【女子委員会】

女子委員会の取り組みについて

女子委員会　委員長　中川　綾子

女子委員会では北海道女子リーグを筆頭に各リーグ戦、全国大会予選北海道大会を各地区協会の皆様のご協力の下、実施しています。

また普及の大会である北海道レディースエイトリーグや道新カップ北海道女子８人制サッカー大会も実施していますが、参加チームは増加傾向です。しかし年代別の大会については新規のチームができる一方で、人数不足などで出場できなくなったり、合同チームを編成したりするチームも出てきています。

大会運営以外の活動として、2023 年度の JFA 女子サッカーデーでは「北海道女子チーム一覧」に加え、「PASS TO THE FUTURE～北海道のフットボールを支える女性たち」第２弾を作成しました。また「挑戦しつづけること、成長への鍵～二人の女性国際審判員に学ぶ」と題して手代木直美氏と大岩真由美氏にオンライン講演会でご講演いただきました。プレーする機会の提供とあわせて、情報共有の機会提供にも積極的に取り組んでいきたいと思います。

【キッズ委員会】

キッズに関わる人たちへ

キッズ委員会　委員長　遠藤　祥悦

いつもキッズの活動に対してご理解ご協力していただきありがとうございます。

キッズリーダー養成、JFA キッズサッカーフェスティバル、幼稚園、保育園への巡回指導の 3 つの柱を基本に活動しています。特に今年度からはキッズ巡回指導に力を入れ、多くの子供たちにスポーツする楽しさやサッカーの楽しさをたくさん伝えていく目的として活動しています。今は少子化が進んでいる中、外でも内でも元気に遊び回る子供たちのためにたくさんの園へ巡回指導をしていきたいと思っています。キッズリーダーを習得された学生さん、保護者の皆さん、コーチなどの方には、様々な場面で活躍されていることに感謝申し上げると同時に、今後も継続して子供たちにために汗をかいていただけばと思っています。そして、インスタラクターやキッズに関わるすべての人たちには、常に子供たちの安心安全を確保しながら、楽しくキッズと関わって欲しいと思っています。そして指導者は、参加者、保護者の手本となるような取り組みの実施も考えて、子供たちへの指導をお願いしたいと思っています。

すべてのキッズサッカーに関わる人たちが共通理解しながら、「もっとサッカーを指導してみたい」や「もっとサッカーがしたい」という気持ちになるような環境作りを皆さんで頑張って作り上げていきましょう。

最後に大好きな言葉ですが、「学ぶことを止めた者は、教えることを止めなければならない」ロジェ・ルメールさんの言葉です。常にこの言葉を思い出しながら、子供たちの笑顔のために活動して欲しいと考えています。

引き続き、キッズ委員会の活動にご理解、ご協力お願いします。

【シニア委員会】

シニア種の現状と今後について

シニア委員会　委員長　佐藤　英隆

シニア委員会及びシニア連盟では、全国大会予選となる真剣勝負の全道大会やサッカーを楽しみ親睦を深める大会など、競技志向に応じて大会の企画・運営を行なっており、2023 年度は全事業を予定通り実施することができました。特筆事項として、2023 年度 JFA 第 11 回全日本 O-40 サッカー大会において、北海道オッサンドーレ札幌 40 が準優勝という輝かしい成績を収めました。

シニア種の登録状況は、JFA がシニア種登録を開始した 2000 年に 11 チーム・340 名でスタートしたのち、増加の一途をたどり、2024 年度 6 月 17 日時点で 132 チーム・2800 名程度となっています。

サッカーが生涯スポーツと言われて久しく、シニア種の活動領域がより一層広がることが予想されるため、シニア部門のサッカー環境を充実させ持続可能な体制とする必要があると考えています。そのため、①10 年後のシニア種のあり方、②シニアカテゴリーの普及（サッカー継続者だけではなく、特にサッカー再開者など）、③女子部門との連携、④審判スキルの向上及び資格保持者の増強、⑤道外地域との交流などを当面の課題と考え、少人数のワーキンググループ制の勉強会をシニア連盟内で実施しているところです。

【技術委員会】

北海道フットボールカンファレンスから

技術委員会　委員長　上田　充士

今年 1 月に実施した 15 回目となる今回は、今後２年間のテーマとして「北海道内のサッカー環境の再構築を図る」 ～指導者養成・普及活動を通して～　を掲げました。少子化や人口減の中でも、希望する人すべてにサッカーができる環境を整えるには、仕組みづくりと指導の両方に創造性をもって取り組める人材の養成が鍵となると考えています。講演では、千葉県で女子のオルカ鴨川を1から立ち上げ、普及・育成・強化の取組を地域密着で継続し、なでしこ１部リーグ優勝という結果も出した本道出身のGMである北本綾子さんから、特に多くの刺激を受けました。

今後も、ユースダイレクターを中心に各地区やブロックの取組を充実させ、キッズや小学校低学年を中心としたスモールサイドゲームの普及などに、各委員会や地区協会の皆さんとともに取り組みたいと考えています。

【医学委員会】

医学委員会活動報告

医学委員会　委員長　神谷　智昭

医学委員会ではこれまで同様、トレセン活動におけるメディカルサポートを行ってきました。選手のサポートを目的として実施していますが、メディカルスタッフの育成も重要と考えています。北海道独自のメディカルスタッフ育成システムを構築できるように、委員会として活動をしています。

また選手・指導者・審判・観客の命を守るため、ＪＦＡスポーツ救命ライセンス講習会の開催にも力を入れています。現在は北海道内のスタッフのみで開催できるようになりました。サッカーの現場で命を落とさないために、教育・啓発を継続していきます。

ＪＦＡ の医学委員と連携し、世界基準でアンチドーピング活動、栄養指導などの活動を行っています。今後も連携を強化しつつ、北海道から世界に発信できる研究・サポート体制を整えていきたいと思っています。